慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古版経済書解題 一千七百五十三年版ロバート・ウォレス著 古代及び現代に於ける人類の数に関する論述
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.4 (1940. 4) ,p.583(123)- 596(136)
JaLC DOI	10.14991/001.19400401-0123
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400401-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

たのである。こゝに、國民黨の民族政策には無理を伴ひ、遂に破端を生ぜざるを得なかつたのである。糾合的民族主義を主張する現代支那に、尙ほ、協調的民族理論と政策の餘韻ある所以である。

古版經濟書解題

一千七百五十三年版ロバート・ウォレス著『古代及び現代に於ける人類の數に關する論述』

高橋誠一郎

一

マルサスの人口論が決して破天荒の大發見ではなく、幾多の先蹤を有するが中にも、殊に、其の原理に於いて、又、是れよりして誘導せられた斷案に於いて正確に彼れの其れと同一なりとすら認められてゐる者にロバート・ウォレスが存することは周知の事實である。マルサス自身も、自己の呈示す可き最重要なる議論が確かに斬新なるものに非ざることを告白し、そがウォレスによつて其の一千七百六十一年の著 Various Prospects of Mankind, Nature and Providence. 中に表明せられて居つたことを自認してゐる。然しながら、マルサスの先驅としてのウォレスの業績は、彼れが本書に先き立ち一千七百五十三年を以つて公にせる A Dissertation on the Numbers of Mankind in antient and modern Times: in which The superior Populousness of Antiquity is maintained. With An Appendix, Containing Additional Observations on the same Subject, and Some Remarks on Mr. Hume's Political Discourse,

Of the Populousness of antient Nations. 中に於いても既に之れを認めることが出來る。吾人が玆に紹介せんとするものは即ち是れである。

二

ロバート・ウォレスは一千六百九十七年一月七日、教區牧師の子として蘇蘭に生れ、一千七百十一年エヂンバロオ大學に入り、一千七百二十年の頃、暫時同大學の數學教授グレゴリィ(James Gregory)の助手を勤め、一千七百二十二年七月三十一日、ダンブレーンの長老會より說教師の免狀を受け、同三十三年ニュー・グレーフライアの牧師となり、四十三年五月十二日、長老會大會(General Assembly)の司會者(moderator)に擧げられた。後に法定の施設と爲つた牧師寡婦基金は彼れの力に負ふ所が大であつた。一千七百四十四年六月、蘇蘭の王室禮拜堂牧師及び王室附屬會堂首牧師に任命せられ、五十九年三月十三日、エヂンバロオ大學より神學博士の名譽學位を授けられ、一千七百七十一年七月二十九日を以つて永眠した。

彼れはエヂンバロオのニュー・グレーフライアの牧師時代に、教會は教會儀式の擧行に於いては精神的に獨立なることを主張して、一千七百三十六年、エヂンバロオのポーテアス事件の暴動者を非議するの布告を其の教壇より朗讀することを拒絶し、時の政府の忌諱に觸れ、是れに由つて嚴罰に處せらるゝも敢て辭せざるの態度を示し、一千七百三十八年八月三十日ニュー・ノース・チァーチに轉任せしめられた。一千七百四十一年十二月ウォールポール內閣倒れ、ウィルミントン內閣之れに代ると共に、彼れは再び教會に於ける勢力を挽回し、五箇年間教會事務の管理と僧職授與權の割當を委託せられた。因に記す、ポーテアス騷動とはキャプチン・ジョン・ポーテアス(Captain John Porteous)が其の軍隊をして群衆に向つて發砲せしめ、死傷者十六七人を出したるに端を發し、ポーテアスは殺人罪

A

DISSERTATION

ON THE

NUMBERS of MANKIND

in antient and modern Times:

IN WHICH

The superior Populousness of Antiquity is maintained.

WITH

AN APPENDIX,

Containing ADDITIONAL OBSERVATIONS on the same Subject,

And

Some REMARKS on Mr. *Hume's Political Discourse, Of the Populousness of antient Nations.*

Terra antiqua, potens armis atque ubere glebae.

EDINBURGH:

Printed for G. HAMILTON and J. BALFOUR. 1753.

に問はれ、罪を宣告せられたのであるが、其の執行を猶豫せられたが爲めに、暴徒の群れは、九月七日、彼れを獄舍より引き出して之れを縊り殺した事件を指して言ふものである。

ウォレスは聖職の餘暇を以つて人口問題を研究し、凡そ一千七百五十年の頃、エヂンバロオ哲學協會に於いて古代及び現代に於ける人口に關する報告を行ひ、當時一部學者の間に問題と爲つて居つた古代民の人口が果して夥多なりしや否やを論議し、而して此の世界を以つて現代に於けるよりも古代に於いて却つて人口稠密であつたと主張する者の間に自己を伍せしめた。是れに由つて這般の問題に對する興味を喚起せられたデーヴィッド・ヒュームは之れを取り上げて再檢討し、而して彼れが一千七百五十二年に刊行せる Political Discourses. の第十論文 Of the Populousness of Antient Nations. に於いて斯問題に關する其の懷疑的意見を表明した。（cf., ibid., p. 155. n.）。之れに對してウォレスが遽きに報告せる論文に加筆を行つて發表したものが即ち本書である。（昭和七年版拙著『重商主義經濟學說研究』六七九―六八一頁參照）。

三

ウォレスは人口の增加が單に人類の生殖力のみに依存するとしたならば、其の進歩が如何に急速なるかを先づ數字的に示さんとする。總べて成熟期に到達せる者が結婚し、而してあらゆる夫婦が六人の子女、即ち男子三人と之れと同數の女子とを生み、其の中の二人、即ち一人の男子と一人の女子とが幼少の頃若しくは結婚前に死去し、是れに由つて四人が殘つて結婚し、而して此の世界を補充するものとしたならば、這箇最初の夫婦が繁殖を始めた時から三十三年三分の一内に彼れ等は六人の子女を擧ぐ可く、而して第二の三十三年三分の一の期間内に次ぎの夫婦の各々は六人の子女を擧ぐ可く、而して斯くの如き事が絶えず生起す可きである。這般の假定に基き、固と最初の夫婦のみが生存せる世界には三十三年三分の一の第一期の終りには六人、即ち本原の夫婦外四人が生存し、六十六年三分の二の終りには十二人、一百年の終りには二十四人、一百三十三年三分の一の末には四十八人、一百六十六年三分の二の末には九十六人、二百年の末には一百九十二人と爲り、斯くて第十九世代六百三十三年の末には一百五十萬を超え（一、五七二、八六四人）、第二十四世代八百年の末には五千萬を超え（五〇、三三一、六四八人）、第三十七期一千二百三十三年の末には四一二三一六、八六〇、四一六人に達す可きである。（ibid., pp. 3-9.）。

然もウォレスを以つて觀れば、吾人は是れに由つて、人類が常に增加しつゝあるものであり、而して太初を去ること最も遠き時代に於いて最も多數であるとか、又は彼れ等が或る一定の法則に從つて規則正しく增加するとか云ふやうな結論を下す可きものではない。却つて、彼れ等の增加が不規則であり、而して前の一定時代に於いて其の後の一定時代に於けるよりも多數であつたことがあらうし、且つ、種々なる原因に由つて、人類の生殖力によつて容易に擧ぐることを得可かりし住民の數が如何なる時點に於いても斷じて此の地球上に存することのなかつたことも慥かである。斯くの如き住民の寡少及び增加不規則の原因は多樣である。其の或るものは、全然自然の經過に依賴し、人類に依存することなきが故に、是れ等のものは自然的と稱せらるゝを得可きであり、他のものは精神的であつて、人間の愛情、激情及び制度に依存する。自然的原因の中、或るものは、極暑及び極寒の氣候、一定地域の不毛並びに氣候及び一定土壤の自然的產物が生殖に取つて不利なること等の如くより恒久的であり、此の種の他の原因は、特殊季節の不良、疫癘、飢饉、地震及び海嘯の如くより不定的である。而して、ウォレスは、是れ等自然的原因が有害なる影響を有して居つたことは疑ふを得ない所ではあるが、而も、斯くの如きものは人間の技倆及び勤勉により、又健全なる法律及び制度により、幾分、或ひは大部分すらも防止せらるゝを得可きものであり、少くと

も、恐らくは一定特殊地域の救濟し得ざる不毛若しくは有害を除いては、一括せられた總べての是れ等自然的原因は、人々の激情及び惡德より生じ而して更らに恒久的にして有力なる影響を有する精神的原因の如く不良なる結果を有することなきものであらうと思惟した。(ibid., pp. 11-13.)。

洵に、人類の過誤及び惡習と政治及び教育の缺陷に由るに非ざれば、此の地球は遙かに多くの人民を有して居らなければならず、恐らく幾多の年代以前に於いて既に人口過多と爲つて居つたであらう。又、是れ等原因の作用の强弱によつて、此の地球は相異れる時機に於いて或ひは其の住民多く、或ひは少なかる可きである。斯くて、又吾人は一定の古代に於いて、現代に於いて存し若しくは現在に於いて存するよりも遙かに多くの住民が此の地球に存して居つたと想像することが出來る。又、此の地球上に於ける人々の數が絶えず是れ迄增加を續けて來なければならず、而して現時に於いては其の數は之れに先き立てる如何なる期間に於けるよりも大であると想像するの要は何等存することがないのである。ウォレス曰く、更らに正確なる研究に基いて吾人は其の反對が眞なることを論結す可き理由を看出す可きであると。(ibid., pp. 13-14.)。

四

著者はより特殊なる研究に進むに先き立ち、先づ、一定の一般準則を設定する。(一)狩獵、漁撈又は牧畜、換言すれば、農商工なく、大地の天産物によつて生活しつゝある野蠻未開の民は斷じて、同一地域に居住しつゝある農耕の道に熟達し商業によつて文明に赴ける人民の如く多數たることを得ない。蓋し、未耕作地は決して耕作地の如く多數の住民を支持すること能はざるが故である。あらゆる國土に於いては、他の事情にして等しければ、常に其の產出する食料の豐富に比例してより大なる住民の數を看出さる可きである、即ち、豐富は常に人民の大多數を促して結婚を行はしむ可きが故である。(二)總べての國土、氣候及び土壤は又等しく增殖に取つて有利ではない。是に於いて乎、最善なる文化、訓練及び國憲を有するものであつても、住民に關して大なる相違が存しなければならぬ。(三)氣候若しくは土壤の性質の外、あらゆる國土に於ける人民の數は、土地分割に關する其の政治的準則及び制度に依存することが大である。即ち若し、土地の平等に極めて近き分割存し、而してそが質樸單純なる態樣に於いて勞働者等に衣食を供するに必要なる所のもの以上に殆んど何物をも生ずること能はざるが如き小配分に分割せらるゝならば、斯くの如き、狀態に於いては、殆んど全く外人と通商を營むの餘地存することなく、又最も單純且つ必要なる技術の外何物も使用せらるゝことを得ないとしても、猶ほ其の國土にして自然に豐沃であつたならば、そは必然多數の人民を有しなければならぬ。斯くて、ウォレスは、或る古代の國民が其の土地を小配分に分割し、而して卓越せる市民すら單に其の家族を維持す可き僅かの新(エーカ)を有するに過ぎざる際には、縱令ひ斯くの如き國民が殆んど商業を有することなく、又單に僅少なる單純にしてより必要なる技術を修得したに過ぎないとしても、そは著しく其の人民に富まなければならぬと論斷するを得可きものであると做してゐる。然しながら、土地が甚しく不平等なる配分に分割せられ、而して大體に於いて、之れを耕作する者を相當に給養す可きよりも遙かに以上を生產するとしたならば、技術にして奬勵せられ、而して土地の勞働者を給養す可きもの以上の餘剩が諸般の技術を修めたる者に割り當てらる可しとせば、猶ほ、よく多數の人民を住はしむるを得可きである。加之、土地が甚しく不平等に分割せられ、而して之れを耕作する者以上に多くを給養するを得る場合に於いても、優雅を旨とし、之れに資する技術に對して相當なる奬勵が與へらるゝに非ざれば、其の國は人口稀薄でなければならぬ。(ibid., pp. 15-18.)。

(四)あらゆる國に於ける人民の數は最も直接に夫婦の數及び多產性並びに結婚に對して與へらるゝ刺戟に依存する

が故に、此の點に於いて常に最大なる注意が拂はるゝ所に在つて、人民の數は、他の事情にして相等しければ、最大なる可く、而して這般の事項に於ける不良なる政策は繁殖に取つて顯著なる抑制を與へなければならぬ。一國民は善良なる風俗と單純なる趣味及び常習の行はるゝに準じて、換言すれば、其の人民が一層節約にして有德なるに準じて一層人口大なる可きである。（五）人類は唯り大地の果實と動物質の食物によつて維持せられ得るに過ぎず、又、食物が供給せられ得るは唯り農耕、漁撈及び狩獵によつてのみであるから、此の地球をして出來得る限り人口夥多ならしむるが爲めには、是れ等の技術、殊に農業及び漁業は十分に撫育せられなければならぬ。斯くて、愈々多くの人物が農業及び漁業並びに是れ等のものを最も有利に遂行するが爲めに必要なる技術に從事するならば、此の世界は愈々人口夥多なる可く、又斯くの如くに使用せらるゝ人々がより少數なる場合には人民の數はより少なかる可きである。其の人民が如何に他の關係に於いて使用せらるゝかは、洵に彼れ等が特殊國民の富と數とを增加することある可き技術に從事するも、而も彼れ等にして食物を備ふるに必要なる態樣に於いて使用せられないならば、本論に於いては何等の重要性をも有せざるものである。ウォレスは此の後の種類の技術中に、這般の目的に對して直接に必要なるものゝみならず、恐らく他の目的に一層直接に役立つものではあるが、而も是れに取つて絶對に必要なるが如き底のものをも包含せしめる。最良種のあらゆる必要なる道具並びに被服及び住宅をすら準備するの技術並びに苟も健康及び勞働に對する力を保持するに資するものゝ如きは是れである。然しながら、彼れは全然裝飾と優美とに資する總べての技術を除外する。而して裝飾に對する技術が最も多く行はれるか、若しくは利用に對する其れが最も多く行はるゝかに準じて、大體に於いて世界の住民の數はより小であるか若しくはより大であるかであらう。是に於いて乎、最大可能なる住民の數を此の世界に於いて有するが爲めには、總べての人類は直接に食物を準備するが爲めに使用せらる可きである。而して斯くの如きものは全地球が十分に耕作せらるゝ迄は常に事實でなければならぬ。然しながら、此の地球が可能なる限り十分に耕作せらるゝに至つたならば、單に裝飾に資するに過ぎざる技術に對する餘地が存す可きである。蓋し、食物を供給するより必要なる勞働に從事するものは、彼れ等自身よりも遙かに大なる數の爲めに之れを獲得することを得なければならぬが故である。（ibid., pp. 19-21.）。

さあれ、著者は有用なる技術を單に裝飾的に過ぎざるものから明確に區別しようとするものでもなければ、況していはんや、人類は大地の全部が最高可能なる程度に於いて耕作せらるゝ迄は、斷じて啻だに裝飾にのみ資する技術に從事す可きに非ざることを主張するものでもない。彼れは單に種々なる種類の勞働の自然的及び必然的結果が如何にあらねばならぬか、又如何なる方法によつて此の地球は最も多く人民を蓄ふるを得るかを考察したに過ぎない。即ち、此の地球は、必要なる技術が最も多く學習せらるゝ際に、最も多くの人口を養ふことを得るのである。斯くの如きは全世界が全體として考察せらるゝ際には妥當しなければならぬ。そは又あらゆる特殊國に對して、唯だ一の例外を除いて總べての場合に適用せられなければならぬ。其の例外と看做す可きは、少數が通商貿易に依つて、國内に於いて孜々として農業に從事しつゝある同一の人數によつて產出せらるゝを得るよりも一層大なる量の食物を輸入し得る場合である。即ち此の場合には、世界一般は人民の數に於いて失はなければならぬのであるが、而も特殊の國民は利得することある可きが故である。斯くて世界一般並びにあらゆる特殊國民は、上述の場合を除いては、奢侈及び優雅なる趣味が行はるゝか、又は單純素樸の風習が行はるゝかに比例し、又、食物を備ふるに必要なる技術が汲々として練磨せらるゝの程度に準じて多少の住民を有せざるを得ないのである。斯くて又、ウォレスは恐らくは多數の了解する所のものとは反對に、商工業が人類の數を增加せしめずして却つて屢々之れを減少せ

しめ、而して特殊國民を富裕ならしめ。又人民の夥しき數を一處に誘致するに拘らず、少なからず全體の上に有害なることある可きを推論する。蓋し、是れ等のものは奢侈を助長せしめ、而して多數の有用なる人々が農業に從事するを阻止するが故である。(ibid., pp. 21-22.)。

之れを要するに、彼れは、古代の素樸が猶ほ失はれずして、人々が依然として農業及び有用なる技術に從事し、而して必要なるよりも優雅なる技術に轉向することなき間は、諸國民はより人口夥多と爲る可く、又奢侈の風旺んなる時は、彼れ等の增加はより遲緩と爲り、而して彼れ等の數は終に減退し始む可きであると信ぜざるを得なかつたのである。(ibid., p. 31.)。

ウォレス以爲らく、是れ等の一般的觀察は、人類が種々なる時代及び國々に於いて如何に其の增加の有樣を異にするであらうかを示すを得可く、又、是れ等のものを特殊國民の歷史に適用するによつて、吾人は種々なる時期に於ける人民の數の大小に關する意見をよりよく構成するを得せしめらる可きであると。之れと等しく、古代史家に基ける現實の計算によつて、或る程度まで一定の著名なる國々の住民の實數を決定するが爲めに幾分の效果を擧ぐるを得可きである。而も、ウォレスは此の種の計算がより不確實であり、第一種の結論がより堅實にして强固と思惟せらるゝを得可きであると考へたのである。(ibid., p. 32.)。這般の論述を行ふに當り、彼れの態度は、古代の歷史家は現代の其れに比して公平ではあるが、而も不正確であつて、各個の事實及び數字は之れを得ることが困難であるが故に、明白なる一般的原因に訴へんとせる其の論敵ヒュームの其れに等しきものではあるが、而もヒュームが、此の世界の人口は現代に於けるよりも古代に於いて大であつたと推定するは不可能の觀あるものと思惟せるに對し、(前揭拙著六七九―六八〇頁參照)、古代及び現在の狀態の最も熟く知られてゐる大多數の諸國に在つては、より古代に於いて存したるよりも後の時代に於いてはより少數の住民存し、現在に於いてはより少數であり、而して是れ等の國々は羅馬帝國が建設せらるゝ以前に於いては、是れ等の諸國があらゆる後の時期に於いて存したるよりも人民を有すること大なりしの觀あるものと見たのである。(ibid., p. 32.)。

而して彼れは之れを最も明瞭なる光の中に置き、斯くの如き考察をして一層有用ならしむるが爲めには、先づ第一に、恐らくは古代國民の多くが現在に於いて最も文明の程度高きものと認めらるゝものよりも更らに人口大なるを示す可き、古代に於ける最も著名なる國々の或るものに於ける人民の數に關する推測を構成するに資す可き古代史家中に於ける一定の章句を注意し、而して後、是れ等のものを英吉利に於ける數字と比較し、而して第二に、之れが諸原因を尋ね、而して事理及び古代の風俗習慣より推して蓋し斯くの如きものが事實でなければならぬか如何かを研究するを以つて妥當と考へたのである。(ibid., pp. 32-33.)。

斯くてウォレスは長き論述の後に於いて結論を下して曰く、衆庶をして繁榮ならしむるものは私市民の間に於ける單純なる趣味であつて、奢侈の流行ではなく、又私の惡德は決して公の便益たることのないものであると。洵に、あらゆる種類の優雅及び精錬を非とするは滑稽である。公事業及び永續的性質を有する物件に現されんか、是れ等のものは社會の宏壯と等しく幸福をも增進するに資し、而して人口の夥多に取つて何等の妨害たることなかる可きである。然も、私生活に於ける最も瑣末なるあらゆる物に現され、而して各箇市民の馬鹿氣た嗜好や氣紛れな粹狂を滿足するが爲めに使用せらるゝならば、人類の數を減少するに資する所が大でなければならぬ。蓋し、這般の奢侈が維持せらるゝ不斷の勞働、大なる經費及び夥しき勞働者數は生活必要品をして稀少且つ高價ならしめなければ已まぬからである。(ibid., p. 160.)。

是れに由つて觀るに、ウォレスの古代人口研究は實に其の一面に於いて、節約は個人の家計をして富裕ならしむるも、而も國家を窮乏せしむると做す彼のベルナール・ヴ・マンデヴィルの The Fable of the Bees: or, Private Vices, Publick Benefits, 1714. に盛られてゐる思想に對する抗論たるものである。（前掲拙著一〇五四—六頁參照）。

五

本書は一百六十頁より成る本文の後に三百三十一頁に至る Appendix containing Additional Observations concerning the Numbers of Mankind in antient and modern Ages: with Some Remarks on Mr. Hume's Political Discourse, intituled, Of the Populousness of antient Nations. を添へてゐる。而も、マカラックは「此の尊敬す可き紳士は、ヒュームの論文の後の諸版に於いて訂正せられた二三の誤謬を指摘するには成功したが、而も彼れは全然其の基礎を動かし、而してヒュームに反對して歐洲は現代に於けるよりも古代に於いて人口夥多であつたことを立證するには失敗した」と稱してゐる。（J. R. McCulloch, The Literature of Political Economy, 1845, p. 257.）。

ウォレスは人口が食料に依存するの事實を認めながらも、後世のマルサスの如く、貧困を救治するが爲めに人口抑制を强調することを爲さずして、寧ろ過去に於ける重商主義的人口論者と等しく國家繁榮の根元たる人口をして夥多ならしめんことを企圖し、而して之れに資すること最も大なるものとして單純素樸の風を養はんことを期したのである。

本書はモンテスキューの監修の下に佛蘭西語に翻譯せられ、又一千八百〇九年には序文的紀要を附して覆刻せられた。

六

ウォレスは一千七百五十八年倫敦に於いて Characteristics of the Present Political State of Great Britain. 八ツ折一卷を公にしたる後、再び人口問題の研究に復歸し、一千七百六十一年倫敦に於いて前掲 Various Prospects. 八ツ折判一卷を出し、後年の論議の上に深甚なる影響を有す可き運命を有する問題を提起したのである。即ち、彼れは本書中に於いて高度の社會的平等と一層公平なる富の分配とを包意する完全なる政體を假定し、而して後、斯くの如き政治の行はるゝ下に於いては、家族を維持するの不便は全然除去せられ、兒童は十分に保護せられ、而して一切のものは人口を大ならしむるに好都合と爲り、概して人類は異常の增加を來し、世界は終に人口過多と爲り、其の夥しき住民を支持し得ざるに至り、斯くの如き空想的計畫は遂に終滅するに至る可き避け難き時期の到來を豫見せざるを得ずと做したのである。（前掲拙著六七六—八頁參照）。而して政治的理想主義者ウイリアム・ゴッドウィンは其の一千七百九十三年の著 An Enquiry concerning Political Justice, and its influence on general virtue and happiness. の第八編第七章に於いて人口原理よりする共產主義的國家組織に對する反對論に就いて考察しなければならなかつたのである。（昭和十二年版拙著『經濟學史』上卷二一八—九頁參照）。洵にゴッドウィンはウォレスを以つて彼れが排擊せんとしつゝある意見の典型的代表者と看做したのである。（cf., Godwin, Political Justice, vol. II, 1793, p. 860.）。彼れは、彼れの描ける美しき社會組織が其の最も完全なる狀態に於いて確立せられたならば、そは單純なる人口の原理よりして三十年を出でずして全然破壞せらる可きを論じたマルサスに對接する以前に於いて、同一の論據に立てるウォレスの意見に對應しなければならなかつたのである。而も、英國勞働階級が猶ほ其の繁榮を極めつゝあつた第十八世紀の中葉に於いて其の筆を運んだウォレスは、人口原理より生ずる困難を以つて遠遠の將來に屬するものと想像するの傾向があつた。マルサスの指摘せるが如く、彼れと雖も尙ほ、大地の全部が栄

園の如くに耕作せられ、毫も其れ以上に收益を增加せしむるの力なきに至る迄は、這般の原因よりして何等の困難も生ず可きものではないと考へてゐた。彼れは未だマルサスの如く是れを以つて刻薄なる世界の嚴正なる實在と觀ることがなかつた。マルサスはウォレスの考察の或るものに負ふ所顯著なるものであると主張せられた。洵に是れ等のものが彼れに示唆を與へたことは疑ひなき所ではあるが、而も兩者の間には產業革命の進展によつて穿たれた深き溝坑の存することが認められなければならぬ。

W・ビヴアリヂ著「英國價格及び賃銀史」

Beveridge, Sir William:—Price and wages in England from the twelfth to nineteenth century. Vol. I. Price table: Merchantile era. With the collaboration of L. Liepmann, F. J. Nicholas, M. E. Rayner, M. Wrettes-Smith and others. pp. lx, 756. London, New York, Tronto, 1939.

三邊清一郎

本書は國際價格史科學委員會 International Committee on Price History の計畫に從つて逐次刊行せられる叢書の一である。この委員會は本書の著者W・ビヴアリヂの創意により一九三〇年ロックフエラー財團の財政的援助を得て創立されたものであつて、その計畫に從ひ既にE・ハミルトンの西班牙價格史研究を初め、佛蘭西、獨逸、墺太利、米國の價格史が公にされて居る。註本書は第一卷には一五五〇年より一八三〇年に至る著者の所謂「商業時代」の價格を、第二卷は一一五五年から一五五〇年に至る「莊園時代」を取扱ひ、第三卷には全期間に亙つて勞働及び小麥の價格を通觀し、第四卷ではこの研究の成果を論評し、そして可能ならば國際價格史研究の全事業に對する結辭を述べたい希望を漏して居る。今回出版されたのはその第一卷「商業時代」篇である。

惟ふに今日ほど資本主義社會機構に於ける價格の役割を明瞭にさせて居る時代はあるまい。均衡理論の教ふると